

‘清見’の挿し木繁殖法と自根樹の特性

堀江裕一郎・鶴 丈和・野口保弘 (福岡県農業総合試験場果樹苗木分場)

Yuichiro HORIE, Takekazu TSURU and Yasuhiro NOGUCHI : Propagation of 'Kiyomi' by Stem Cutting and Characteristic of Own-root Tree

カンキツ‘清見’の挿し木による自根樹育成法と育成した自根樹とカラタチ系統台木品種に接ぎ木した‘清見’との生産力との比較を行ったので報告する。

1. 材料及び方法

1) 自根樹育成法

(1) 薬剤による発根促進

1998年11月、6年生‘清見’から秋枝を採取し挿し穂とした。挿し穂の着葉は最先端葉の半分をせん除した1葉とし、挿し穂長約12cmに調整後、NAA等の薬剤に16時間基部浸漬処理した。1区26～46本を供試し、パーライト用土に挿し木した。3か月後に発根調査を行った。なお、挿し木期間中床温は20°Cに維持した。

(2) 挿し穂調整部位による発根率の違い

1989年6月、7年生‘清見’から約40cmの長さの春枝を採取した。春枝の先端、中間、基部の各部位で、(1)と同様に挿し穂を調整し、IBA30ppmに16時間基部浸漬した。各区37本を供試し、パーライト用土に挿し木した。3か月後に発根調査を行った。

2) 生産力比較

1989年、挿し木発根した‘清見’10本とカラタチ4本、ヒリュウ10本に接ぎ木した‘清見’をポットで育成した。1990年、20kgコンテナに移植し供試樹とした。

2. 結果及び考察

1) 自根樹育成

発根率を高める薬剤はIBA30ppm区が54.8%、NAA30ppm区が46.2%と高く、2,4-D30ppm区、フロログリシン3,000ppm区は低かった。塩化コリン250ppm区は処理効果が認められなかった。

挿し穂の調整部位による発根の違いは、枝先端部位の発根率が85.3%と最も高く、中間部位は挿し穂の生存率が低く、発根率も低くなった(第1表)。

このことから、‘清見’の自根樹の育成は春枝先端を挿し穂とし、IBAまたはNAA30ppmに1夜浸漬し、挿し木すると発根が促進されることが明らかになった。

第1表 挿し穂調整部位による発根の違い (1989年)

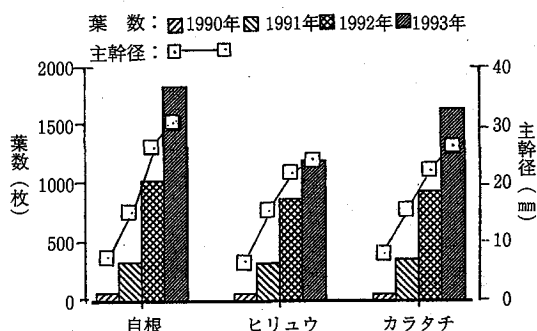
供試部位	生存率 (%)	発根率 (%)	発根程度 (本)	発根長 (cm)
先端部	91.9	85.3	3.3	5.6
中間部	75.7	42.9	3.2	4.8
基部	94.6	60.0	2.5	3.4

2) 生産力比較

‘清見’の自根樹と接ぎ木樹の栽植後4年間の葉数の増加、主幹径の伸びは自根樹で最も大きく、カラタチ台、ヒリュウ台の順となった(第1図)。栽植後4年経過した自根樹とヒリュウ台接ぎ木樹を解体比較した結果、全生体重は自根樹で大きいものの、地上部に対する地下部の重量割合はヒリュウ台で高かった。根の太さでは、自根樹は特大根の占める割合が高く、ヒリュウ台は細根の割合が高かった。

着果樹率の割合はヒリュウ、カラタチ台で高く、接ぎ木することにより結実開始時期が早まる結果となった。果実品質はヒリュウ台で葉果比が小さいに関わらず1果重が重くなったことを除き、自根及び台木間による顕著な差は認められなかった(第2表)。

以上のことから、自根樹は接ぎ木樹に比較して樹勢が強くなり、結実開始時期が遅れる傾向が見られた。今後、生産力と共に根の活力等自根樹の特性を明らかにする予定である。



第1図 葉数と主幹径の推移

第2表 台木別‘清見’の果実生産 (1992年)

台木種類	着果樹割合 (%)	葉果 ^{a)} 比 (%)	果実 ^{b)} 数 (個)	果重 ^{c)} (g)	果肉 ^{d)} 歩合 (%)	Brix ^{e)} (%)	クエリン酸 (%)
自根	40	131	7.0	286	73.2	9.3	1.36
ヒリュウ	90	88	9.3	328	72.6	10.0	1.33
カラタチ	75	99	9.3	282	66.2	9.4	1.50

注: a) a) は9月, b) ~ f) は1月に調査した。

b) a), b) は着果した樹当たり, c) は収穫果実全体の平均値,

d) ~ f) は5果の平均値。